

ブルガル・ハン名録
—ちよんまげと元号—

城田 俊*
恩田 義徳**

«Именник болгарских князей»
—Тёнмагэ и девизы правления—

СИРОТА Сюн
ОНДА Ёсинори

«Именник болгарских князей», написанный на смеси старославянского и неизвестного языка, сохранен в «Еллинском и Римском Летописце», который был открыт в 19-ом веке. Автор и время создания компилятивного сборника неизвестны.

В «Именнике» содержатся имена князей (ханов), сведения о роде происхождения и загадочные слова неизвестного языка. Предполагается, что они являются словами древнеболгарского языка и выражают девизы правления ханов в дунайской Болгарии. Но никакому из ученых не удастся истолковать их на этой основе.

В статье помещается перевод «Именника» в виде таблицы, причем не истолкуемые слова приводятся в оригинальном написании.

* 本学名誉教授

** 東京外国語大学非常勤講師

	Имя	Лет	Род	Девиз правления	Примечание
1	Авитохоль	300	Доуло	диломъ твиремъ	Эти 5 князей по ту сторону Дуная 515 лет с остриженными головами.
2	Ирникъ	150	Доуло	диломъ твиремъ	
3	Гостоунъ	2	Ерми	дохсъ твиремъ	
4	Коургъ	60	Доуло	шегоръ вечемъ	
5	Безмѣръ	3	Доуло	шегоръ вечемъ	
6	Есперих	61	Доуло	венениалемъ	После этого на эту сторону Дуная перешел князь Исперих, как и по сей день.
7	Тервель	21	Доуло	текоучитемъ твиремъ	
8	...	28	Доуло	дваншехтемъ	
9	Севаръ	15	Доуло	тохалтомъ	
10	Кормисошь	17	Вокиль	шегор твиримъ	
11	Винехъ	7	Оукиль	шегоралемъ	
12	Телець	3	Оуганъ	сомор алтемъ	
13	Оуморъ	40 дней	Оукиль	диломъ тоутомъ	

В статье сопоставляются девизы Жуанъжани с Японскими девизами.

Праболгарские ханы отличались бритыми головами. Это засвидетельствовано в «Именнике», где они названы «князьями с остриженными головами». Праболгары оставляли на голове пучок длинных волос, которые заплетали в косу (или косы). Такой пучок на бритой голове носил великий князь киевский Святослав I, который разгромил Хазарский каганат, и запорожские казаки. В статье сопоставляется такой пучок с японской прической «тёнмагэ».

1. 由来

古スラブ語で書かれた謎めいた名簿である（図表1）。

Ѹвнто хѡлаз жнтѣ лѣтѣ ꙗ, родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу днлоу мѣ твиремѣ.
 н рннкѣ жнтѣ лѣтѣ ꙗ н¹ ѿ лѣтѣ², родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу днлоу мѣ твиремѣ³.
 гостѡу нѣ намѣстникѣ сы ѿ⁴ лѣтѣ⁵, родѣ емоу ермн, а лѣтѣ емоу доулоу мѣ твиремѣ⁶. коу рѣтѣ
 ѿ⁷ лѣтѣ дрѣжа, родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу шегорѣ вѣчемеѣ. бѣзмѣ рѣ⁷ ѿ лѣтѣ⁸, а
 родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу шегорѣ вѣчемеѣ. синѣ ѿ князь дрѣжаше княженне ѡб
 ѡноу странѡу доунаѣ лѣтѣ ѿ⁹ н⁹ ѿ острнженнми главами. н потѡмѣ прнде на странѡу доунаѣ
 нспернху кнѣзь, тожде н до свѣтѣ. ѿспернху¹⁰ кнѣзь ѿ¹¹ н¹¹ однно¹² лѣтѣ¹³, родѣ емоу¹⁴ доуло,
 а лѣтѣ емоу керенналемѣ. Тервель¹⁵ ѿ¹⁶ н¹⁶ ѿ лѣтѣ¹⁷, родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу
 текѡучнтѣмѣ. твиремѣ ѿ¹⁸ н¹⁸ ѿ лѣтѣ, родѣ емоу доуло, а лѣтѣ емоу дваншѣхтѣмѣ.
 севарѣ ѿ¹⁹ лѣтѣ, родѣ емоу доуло. а лѣтѣ емоу тоу халтоу мѣ, кормнсошѣ ѿ²⁰ лѣтѣ,
 родѣ емоу вокнѣ, а лѣтѣ емоу шегорѣ твиремѣ. снѣже кнѣзь нзмѣнн родѣ доулоу мѣ,
 рекше внхтоу нѣ. вннѣхѣ ѿ²¹ лѣтѣ, а родѣ емоу оу кнѣ, а лѣтѣ емоу нмѣ шегорѣ
 лемѣ²². твельцѣ. ѿ²³ лѣтѣ, родѣ емоу оу ганнѣ, а лѣтѣ емоу солорѣ алтемѣ. н снѣ
 нного родѣ. оу мѡрѣ ѿ²⁴ дннн, родѣ емоу оу кнѣ, а емоу днлоу мѣ тоу тоу мѣ²⁵.

P = No. 1437 der Pogodin-Sammlung [jetzt in der Öffentlichen Bibliothek in Leningrad] (s. XVI) f. 72^v—73^r S = No. 280 der ehemaligen Synodal-Bibliothek [jetzt im Staatl. Historischen Museum in Moskau] (s. XVI) f. 68^v—69^r
 U = No. 10 der Uvarov-Sammlung [jetzt im Staatl. Historischen Museum in Moskau] (s. XV) f. 69^v—70^r.

¹ н ом. U	² лѣтѣ ом. U	³ твиремѣ · U	⁴ два U	⁵ лѣтѣ PU
⁶ втиремѣ P втиремѣ U	⁷ бѣзмѣ рѣ correctum ex бѣзмѣ рѣ P	⁸ лѣтѣ P		
⁹ н ом. U	¹⁰ ѿспернху PS	¹¹ н ом. U	¹² ѿ U	¹³ лѣтѣ U
¹⁴ емоу ом. U	¹⁵ тервель U	¹⁶ н ом. U	¹⁷ лѣтѣ PU	¹⁸ н ом. U
¹⁹ нмѣше горалемѣ Tichomirov	²⁰ тоу тоу U. — Die übrigen orthographischen Varianten siehe in den Ausgaben von МИКОЛА и ТИХОМИРОВ, wo auch die Faksimiles der drei Handschriften zu finden sind.			

図表1 「ブルガル・ハン名録¹」

『ギリシア・ローマ書紀²』の名で伝わるロシアの比較的新しい年代記の中に挿入され、残された。ギリシア文字で刻まれた碑文から書き取ったのではないかと推定されている。ブルガリアの初代ハン（カガンに同じ。ブルガリアに関して以下ハンを用いる）から13代までの在位年、出身氏、元号がリストアップされている。ブルガル人が自身の過去をどう認識していたかを伝える最初の文書であり、ハザールに類例を求めるなら「ヨセフの返書」にあたるだろう。和訳はブラウニングp.327にある。わかりやすく内容を表示すると図表2のようになる。

代	名	在位年 (推定)	氏族	元号	注
1	アヴィトホル	300	ドゥロ	ディロム・トヴィレム	これら5人の ハンは515年 間ドナウ川の 向こう側で頭 を刈って君臨。
2	イルニク	150	ドゥロ	ディロム・トヴィレム	
3	ゴストウン (摂政)	2	エルミ	ドフス・トヴィレム	
4	クルト	60 (584-642)	ドゥロ	シェゴル・ヴェチェム	
5	ベズメル	3 (642-646)	ドゥロ	シェゴル・ヴェチェム	
6	エスペレリフ	61 (645-701)	ドゥロ	ヴェレニ・アレム	エスペルフが ドナウ川を渡 河。ブルガル 人は今もここ ら側に住まう。
7	テルヴェル	21 (701-718)	ドゥロ	テクチテム・トヴィレム	
8	?	28	ドゥロ	ドヴァンシエフテム	
9	セヴァル	15 (725-739)	ドゥロ	トフ・アルトム	
10	コルミソシ	17 (739-756)	ヴィキル (ドゥロ改め ヴィフトウン)	シェゴル・トヴィレム	
11	ヴィネフ	7 (756-761)	ウキル	シェゴラレム	
12	テレツ	3 (760-764)	ウガイン	ソモル・アルテム	
13	ウモル	40日 (766)	ウキル	ディロム・トゥトム	

図表2 「ブルガル・ハン名録」の内容
(カナ表記は主にブラウニングp.327を踏襲)

2. 人名

2代イルニクはアッティラの愛息エルナクである。初代アヴィトホルはフンの大王アッティラ [アルタイ諸言語にあるata「父」にゴート語の指小・表愛接辞-ilaがついたもの。「パパさん」とか「とつつあん」という感じのはなし言葉] をうやまっの尊称と思われる。ブルガル族は本来トルコ系。ウイグル族と同じく突厥の開祖ブミン可汗(土門)を祖先とする伝説³を持っていてもいいはずだが、無関係なフンに始祖を求めている。ドナウを渡河して、下流域に住み着いたブルガル族がそこに居残るフンの遺衆と交流したり、政治的に組み込んだりしているうちに、権威付けにはもってこいの感のあるアッティラを、始祖として伝説の中に取り込んだものだろう。

3代目として名が掲げられているゴストウンを多くの学者は、ビザンツ史料

に出てくるクブラトの伯父オルガナと同一視⁴する。クブラトが幼少の頃、ないし、ヘラクリウスの宮廷に居た頃、摂政となって政治を行っただろう。

4代目はどうあってもドナウ川下流域にブルガリアを建国したクブラトであろうが、名録は名をクルトとする。qurtは「狼」。蠕蠕の木骨閭、氏族名郁久閭いくきゅうろの末尾、骨閭・久閭もクルqur, qurtでやはり「狼」。高車・突厥共にオオカミを祖先とする伝説を持ち、狼をトーテムとしていたことが知られる。ブルガル人も同様の説話を持っていたことが考えられる。

5代目ベズメルはクブラトの長男バトバヤンのことと思われる。アスパルフ西移後、3年間、故地に残ったブルガル族を統率するが、ハザールに屈服する。カフカスに今も生活するバルカル族の遠い祖先のハンと思われる。

バガ・シャド系アシナ家に指導されるハザールを主力とする軍勢に追われて、南ロシアからドナウ川下流北岸地域に移動したブルガル勢約一万を率いたのはクブラトの三男アスパルフである。名録では6代目。エスペレリフの名で出てくる。680年、彼はビザンツと条約を結び、ドナウ川からバルカン山地にいたる土地にブルガル族が居住することを正式に認めさせている。帝国内に「蛮族」の国が存在することをビザンツが認めたのはこれが最初である。かくして、現在に至るブルガリアが建国される。

テルヴェルの名も見える。7代目にあげられている。アスパルフの子に当たるのだろう。彼がユスティニアヌス2世の劇的復位を、援軍を出して助けたことはギボンの『ローマ帝国衰亡史』48章で述べられている⁵。

テルヴェルという名を聞くと蠕蠕の可汗、豆羅伏跋豆伐が思い出される。

白鳥庫吉、藤田豊八がモンゴル語で次のように解説している。豆羅türü「法」伏bēr「…をもって（名詞造格形成接辞）」拔豆badara「照らす」伐buri「こと（名詞化する接辞）」⁶。古トルコ語でもこのパラレルをひくことができる。törü「法」⁷、birlä「…をもって（名詞造格形成後接辞）」⁸。

法（秩序）をもって（治める）という意味だろう。ビザンツ史料や名録でテルヴェルと短縮されているが、蠕蠕の可汗同様の長い名の前部だった可能性がある。

ギボンは、彼のことを、娘を与えるとか、財宝、金貨の山を提供するとかというユスティニアヌスの甘言につられてブルガリアから大軍を率き連れて馳せ参じた強欲な「蛮族の征服者」⁹として描いているが、彼に付き従ったブルガル人・スラブ人にとっては決してそんな君長ではなかったに違いない。ビザンツ領内の孤島のような頼りなげな国の基礎を、好機を機敏に見付けて固め、安

寧と秩序をもたらした建国2代目として深い尊敬を勝ち得ていた人物だったと思われる。

3. ドウロ氏

摂政ゴストゥンを除くが、9代セヴァルまでカガン位はドウロ氏によって独占されている。ドウロ氏は、突厥アシナ氏（絶対王族）、ウイグルのヤグラカル氏（有力氏族からカガン位独占するようにのし上がる王族）のごとき存在であったのだろう。10代コルミソシ以後王朝の交替があったが、いかなる事情の下でなされたか推測する手掛かりがない。

このドウロ氏とは、西突厥の東部・右翼たるトゥロク部の名をかたるものであるという説がグメリョフ、アルタモノフによって唱えられている¹⁰。

ハザールは西部・左翼にあって、ヌビシ部に属していた。ブルガルは更に西にありながら、ハザールに攻撃され、追い立てられたため、対抗上、東部・右翼のトゥロク部に支援を期待したか、仰ぐ形になったと考え、このような説を立てたもようである。

ドウロがトゥルク türk 「強い」¹¹を表すなら、もっと単純に考えてもよさそうだ。

突厥には咄陸トゥロクを名の一部にする人物が多数いる。トゥルクサントス Turxanthos トゥロクシャド咄陸設¹²、奚利邲咄陸可汗イルテベルトゥロクカガン¹³（泥孰バガ・シャド）などがそうだ。トゥルクは、ソグド人・ハンガリア人・中国人・スラブ人などと話す言葉が全く異なるトルコ族、トルコ系人という大きなまとまりを表すのではないだろうか。

ブルガルはハザールに追われ、遙けくもドナウ川を渡河し、北岸に来てしまった。出会うのは、ギリシア語・ラテン語・スラブ語その他わからぬ言葉をしゃべる者たちばかりである。アスパルフ達は自分たちがトルコ系人であることを強く意識せざるを得なかった。かくして、氏族の名としてドウロ（トゥルク）を選んだのかもしれない。

名録に掲げられる草創期のハンたちをドウロ朝と呼び、クルム・ハンからボリス1世、ボリス2世、ロマンに至る王朝をクルム朝と区別する学者がいる¹⁴。ドウロ朝に関しては10代目から氏族の交替があり、正確ではないが、役に立つ区別であろう。

4. 「頭を刈って」

ブルガル人は、ハザール人、一部アバル人らに隣あって南ロシアに住んでいた時、つまり、クブラトの時代まで、「頭を刈って」いた、と名録に記されている。

単に髪を短く刈り込んだ坊主頭にしていたというのではないだろう。頭髪をそり落としたスキンヘッドでありながら、丸坊主ではなく側頭・頭頂・後頭のどこかで髪を残し、束ねていたに違いない。一本に束ねていたか、複数の条にしていたか、断定できないが、恐らく、清朝の中国人と同じく、一条にまとめ、そう長くはないにしる、後ろに垂らしていたのではなかろうか。

ハザールを滅亡へと追い込んだルシの大侯スヴァトスラフもこのような髪形をして¹⁵、伊達をきめこんでいた。この髪形は恐らくハザールの風俗をまねたものだろう。なにしろ、ルシはハザールの文化に憧憬を持っていた。スヴァトスラフもその祖先もハザールに憧れ、範をとり、自らを称するにカガンという称号を用いていたことでもそれは分かる。ブルガル人とハザール人は隣接して住み、文化・習俗はほとんど同じであった。クブラトやバトバヤン（ベズメル）のおさげも一本であったと思いたい。

頭髪をきれいに剃り、一部の髪を残す風習はブルガル人・ハザール人の故地に長く残り、ウクライナのコサックはこの髪形を好んだ。その粋な姿をはっきり見られる名作絵画がある。レーピンの『トルコのスルタンへ手紙を書くザポロージェ・コサック』（図表3）だ。笑ったり、おごそかな顔をしたコサックはツルツルのスキンヘッドの頭頂部に一本短く髪がまとめられている。奇妙にも側頭部の右についていたり、右側に垂らしているものがある。これはレーピンの想像か、有職故実に則るものか、調べがつかない¹⁶。ツルツルの頭に残した房毛をロシア語ではオセレディエツオセледецという。



図表3 レーピン『トルコのスルタンへ手紙を書くザポロージェ・コサック』
1891, ロシア国立美術館

日本のちょんまげは^{さかやき}月代（前頭・頭頂部で髪をそり落とした部分。以下この語を用いる）をつくり、残した髪を一本にまとめる点、スヴァトスラフ、ウクライナ・コサックのオセレディエツ、清朝の満州人・中国人の弁髪と同じ系列にある。ただ、髪は編まず、一本にまとめられ、折り曲げられて頭頂部に置かれる点に違いがある。この結い方は今も力士のまげに残されている。



図表4 ちょんまげ¹⁷



図表5 弁髪の清人¹⁸

遊牧民の間では月代さかやきをつくり、側頭部左右の髪を編んで二条のおさげにして、両肩の上に垂らす髪形もあった。突厥・鉄勒がそうであったという。ただし「髪を結わない」という記録もある。時代・地域で差があったのだろう。

匈奴・拓跋・蠕蠕などでは髪を編んで背に垂らしたらしいが、前頭・頭頂を剃っていたかどうか、はっきりしない。

アバル人、ウゴル人（ハンガリア人）は前部を刈り、残した髪を数条のおさげに編んで垂らしていた。この髪形はコンスタンティノープルのしゃれ者の間で「フン族刈り」と呼ばれて流行ったという¹⁹。日本の若者の間で、何度か波をなして「モヒカン刈り」が流行ったことが思い出される。

ヘラクレイオス1世（575頃-641）と同盟し、バガ・シャドや息子のシャドに率いられてカフカスに侵入した西突厥軍はさまざまな髪形をしていたようだ。「頭を剃るもの、髪を編んで垂らすもの」²⁰とモウセス・ダスフランツィ『カフカス・アルバニア史』にあるので、月代をつくり、一本ないし複数の条にまとめるものと、月代を持たず単に髪を編み、おさげにしてたらすものがいたのだろう。月代を持つのは、ハザール兵、ブルガル兵、単に髪を編み、おさげにしていたのは突厥兵であろう。

同じく『カフカス・アルバニア史』に、デルベントを強襲したハザール（実は西突厥）軍の様子を「ぼさぼさの髪を垂らした女の姿」²¹と描出するのは、周書『突厥伝』に「突厥は髪を結わない」²²という記載に符合する。「北の帝王」トン・ヤブグ可汗は支配下にある広大な地域に広がる様々な民族から兵を集めてペルシア遠征に送り出したようだ。

玄奘（三蔵法師）がトン・ヤブグ可汗に出会った時、カガンは髪を一丈（おそらく225センチ）ばかり、後ろに垂らしていた。原文では「露髪」²³とあるので、かぶりものはかぶらず、額の所で絹布のはちまきをしめて髪をまとめ、ふさふさと背に垂らしていたようだ。月代はなかった。このような髪では胃はかぶれない。トン・ヤブグは、戦場には出ず、神聖君主として「家」にいたのではないか〔『通典』（197、突厥上）を参照されたい〕²⁴。

お供のタルカン（高級官僚、御家人）200余名は「編髪」にしていたと書かれている。「編髪」とは「弁髪」のことである²⁵が、月代をつくっていたか、単に髪を編んでおさげに垂らしていたか、はっきりしない。

髪を編む風は自然発生的にどこにでも起こりうるが、手間のかかる月代はなぜ発生したのだろうか。

成人男性に月代をつくる風習が日本で起こったのは武士の時代が始まる鎌倉

時代からだという。冑をかぶっているときの暑さ・汗対策から起こった、というのが定説である。戦乱に次ぐ戦乱の戦国時代、月代は大きくなった。側頭・後頭部の髪は束ねられ、茶筌^{ちやせん}・二つ折り・巻き立てなどの髪形があった。髻と称される。

こういわれると、月代をつくることは日本で独自に起こり、発達したように感じられるが、対岸の大陸の東北部に居住したり、現れたりして、日本と交流を持たざるを得なかった肅慎・靺鞨・金朝人、元朝のモンゴル人などにも月代をつくる風習があったのだから、日本独自に発生したという考えには疑問を呈しておいていいだろう。

しかし、冑を長時間かぶった時の暑さ・汗対策として発生したという考えは、定住民を襲撃する戦闘手段を発達させた騎馬民での発生・広い伝搬を考えるうえで有用かもしれない。

ヘアスタイルは、現代人には、衣服と同様、ファッションであり、流行である、ととらえられがちであるが、次項で触れる元号と同じく、政治的支配・服従の信号体系の中に組み込まれやすく、その認知・確認の手段となり得る面があることを見逃すわけにはいかないだろう。

清朝は中国侵入を果たすや否や、支配地の人民に清朝の衣服と月代を持つ弁髪を強制した。これをもって服従の保証としたのである。

サマルカンド(康国)の王は、突厥西部の王者達頭カガンの支配下にあり、娘を妻として与えられていた。住民は断髪(ショートカット)であったが、王は突厥の風俗に従い「編髪」していた。服従の信号を身体をもって示していたのである。以上は『隋書』西域伝²⁶に見える記事であるが、『旧唐書』を見ると記載内容は異なってくる。住民は断髪のものもいれば編髪(弁髪)のものもいる²⁷となる。支配が長期に渡ると、住民にも突厥風俗が及ぶのだ。

同じ『旧唐書』に、西突厥支配下のクチャ(亀茲)では住民は断髪だが、王は断髪せず、と記される。サマルカンド王と同じように、突厥風の編髪をしていたのであろう。

外国の例ばかり引いているわけにはいかない。今から150年ほど前(1871年)「散髪脱刀令」が明治政府から出された。断髪・脱刀は自由にやっていたという布告である。われわれの曾祖父やその先代の多くはこの布告を境にしてちょんまげを切り落とし、「ざんぎり頭」となったのである。新体制になびくことが自然に示されたと見ていいだろう。ちょんまげを残した少数の人たちの心中には苦いものがあったに違いない。

戦時中の日本では、布告はなかったようだが、多くの男性は丸刈りであった。戦いに敗れると、大人は多少の例外を除き、ポマードを付け、洋風に髪を伸ばすようになった。自覚・無自覚には程度があり、個人的にはさまざまな理由があったであろうが、全体を俯瞰するなら、丸刈りは反西洋主義風潮への、断髪は「民主主義」を含めての西洋文化への、順応を表わしていた。「近代の超克」の論者の髪形はどうだったのだろうか。

敗戦後疎開から帰ってきた後も全員坊主頭であった（国民学校改め）小学校高学年の生徒の中ですぐに長髪（断髪のこと）姿になったのは在日朝鮮人の子弟であったという話を聞いたことがある。忘れるには惜しい戦後風俗の細部だろう。

75年ほど前に米国に占領された日本国も1400-1500年ほど前に突厥に支配された中央アジアの都市国家も何らの変わりはない。

髪の長・短、刈り方、色彩、ウェーブの有無が、今も中学・高校でトラブルの発生源となるのは、支配・従属のみならず、支配形式の賛否（規律への順応・反抗）の表示手段となり得るためでもあろう。髪は自由に形を変えられるが、身体の一部である。その人の髪である限り、他人に譲渡できない。もし記号として用いるなら、昼夜を分かたず常時発信者を受信者に現前させつつ発信を続行できるという超絶能力を持つ。

頭髪記号を解説する限り、日本人は僅々80年の間に全国民的規模で3回転向・服属を果たしている。丁髷—散切り（欧化）、散切り—坊主刈り（国粹化）、坊主刈り—短髪（「民主化」）。

ハン名録が、5代バドバヤン（ベズメル）までドナウ川のむこう（南ロシア）で「頭を刈って」いたと殊更に記すのは、6代アスパルフ、7代テルヴェルの時代になるとドナウ川とバルカン山地の間に移り住み、頭髪を剃ることを止め、ヘラクレイオス1世やユスティニアヌス2世のように断髪スタイルに改めたことを意味する。東の騎馬民族風から西のローマ帝国風にモードを転換したのだ。テルヴェルはハンであったが、コンスタンティノープルでカエサル の称号が与えられている。キリスト教に改宗したらしい。ブルガル人は、かくして、日本より1200年ほど前に「脱亜入欧」をはたしたのだ。ブルガル人を無理やり「入欧」させたハザール国は滅びたのに対し、ブルガリアが現在まで続くのはビザンツ領域内に建国したという地の利ばかりではないだろう。アスパルフやテルヴェルのざんざり頭が文明開化の音がしたわけではないだろうが、時勢を見極めて指導力を発揮できる福沢諭吉のような人材が危機に直面した時現

れたと思いたい。

5. とさかーウクライナ人ー

騎馬民族由来のオセレディエツ（月代を持つ弁髪）はブルガル・ハザールなどトルコ系人を通してキエフ大侯の髪形として好まれ、ザポロージェ・コサックにも受け継がれたことを見たが、同じウクライナであっても、キエフ大侯スヴャトスラフは10世紀の人、ザポロージェ・コサックがドニェプル下流に根拠地を築いたのは16世紀。この間オセレディエツはブルガル・ハザールの故地でどう生き永らえ、コサックに受け継がれたのであろうか。ボルガ・ドン・ドニェプル川流域住民の風俗資料を精査する必要があることはもちろんであるが、この間の事情を想像させる言語資料があるので少々書き足したい。

ホホルхохол [xaxóh] という語がロシア語にある。1618-1619年の文書でもすでに確認できる²⁸。鶏冠を意味するが、オセレディエツと同義語であり²⁹、また、ウクライナ人を表わす。オセレディエツを鶏のとさかに見立て、その髪型をするウクライナ人を馬鹿にして使ったことばである（現代語辞書では冗談や、親愛表現として使えるとの注記がある）³⁰。

オセレディエツは、モンゴルの来襲に耐え、現在ウクライナと言われる地方の住民に広く結われていたのだろう。コサックだけではなく、ウクライナ地方に住む人々によって使われ、愛好されていたのだろう。

歴史的・地政学的理由が重なってか、ウクライナには純度の高い中央集権国家が育たなかった。常に外来勢力に侵略され、隷属化に置かれる危険にさらされていた。住民は（ハザールまで言っていないかわからないが）、モンゴル、クリミア・ハン国、オスマン・トルコ、ポーランド、リトアニア、スウェーデン、オーストリアそして帝政ロシアなどとの闘争に明け暮れてきた。ソビエト期にも厳しい形相をのぞかせたウクライナ民族主義の根っこにはこのような歴史がある。その間、オセレディエツと称される髪型は、従属を拒み、自由で自立するウクライナ住民のアイデンティティーを象徴する記号になっていたのではなからうか。いつ、その髪型が消えたのか、調査の必要があろうが、18世紀エカテリーナ2世によるゲトマン制廃止後、だんだんとロシアの植民地が進み、19世紀にはヨーロッパの穀倉と言われるようになり始めた頃と想像しておきたい。戦後ほとんどの日本人が丸刈りを止めたように、ウクライナ人も18-19世紀オセレディエツを途絶えさせ、ロシアに同化していったのだろう（立ち姿のちょんまげはオセレディエツよりはるかにとさかに見立てやすいが、ゴロヴニン

〔来日は1811年〕、ゴンチャロフ〔1853年〕も日本人の役人のちょんまげをとさかとは見なかった。もちろん、多忙な公務。余裕がなかったし、あったとしても礼節から変な見立てを抑制したに違いない。その上、19世紀の人である兩人はхохол（=украинец）に日常接していても、хохол（=оселедец）を見たことがないので、ちょんまげとхохол（とさか）のイメージの相似に思いが及ばなかったのかもしれない。

6. 元号

初代アッティラ、2代エルナクはディオム・トヴィレム、4代クブラト、5代バトバヤン（ベズメル）はシェゴル・ヴェチェム…（以下図表2）。

いったいこれは何を意味するのか。即位の年・月を十二支紀年法で表わした、という説が一時有力だったが、マルクワルト、後にベンツィングはそれを批判し、元号であるという説を立てる³¹。もし元号なら王者ハンの治世のモットー、理想を表したものだだろうが、何語であるのか、どういう意味なのかははっきりしない。ただこの説は大変魅力的である。

元号を定めることは最高権力者の権威を示す。用いて年を表示するのは、その権威に従うことを表す。統治の手段のひとつとなる。漢の武帝から正式に用いられ始めたというから、匈奴がまねてもおかしくないが、騎馬民でこの中国起源の時の流れの示し方を最初に取り入れたのは蠕蠕である。永康（464－485）、大平（485－492）、大安（492－506）、始平（506－508）、建昌（508－520）のように一代一元方式により王朝末期までシステムティックに用いている〔ただし、最後の可汗、阿那瓌の元号は伝わっていない〕。

日本で元号が正式に用いられるようになったのは、聖武天皇の父である文武天皇からであるという。大宝という元号を選定した。西暦で言えば、701－704年。ブルガリアのテルヴェルの治世に当たる。すでに述べたようにテルヴェルとは「法によって（治める）」を意味するらしい。文武天皇も大宝律令を施行したことで知られるよう、法による統治をめざした初期の天皇である。

太平洋に浮かぶ島国日本でもヨーロッパ大陸の東の一角ブルガリアでもほとんど同時期に中国の政治文化が取り入れられ、元号が用いられ始めたようだ。初代アッティラ、2代エルナクなどは伝説上の人物。元号の制度ができた後にディオム・トヴィレムという元号が考案されたのだろう。何代目からこの制度ができたかわからないが、テルヴェルあたりと想定しても著しくは誤たないのではないか。

余談になるが、蠕蠕^{テルベル}の豆羅伏跋豆伐可汗の治世の元号は建昌である。文武の大寶、テルヴェルのテクチテム・トヴィレムなどより2世紀ほど早い。蠕蠕は、地の利もあろうが、ブルガリアや日本より中国文明吸収においてはるかに先進性を持つ。

元号の制定は、朝鮮半島の諸王朝、高昌、渤海、ベトナム、日本など、中国の影響を強く受けた地域に広がる。もし、ハン名録の未解読語が元号であるなら、ブルガリアは分布の西限となるであろう。

どんな民族集団がブルガル人にこの制度を伝えたのだろうか。蠕蠕での組織的使用、蠕蠕—アバル説、アバル人とブルガル人の長い接触の歴史から見ると、アバル人が思い浮かべられるが、アバル人が元号を用いた形跡を見出すことはできない。

元号はハン名録に載せられた歴代ハンのみが用いただけではなさそうだ。

「このボリスが、エトゥッフベフティの年に、ブルガルの民に洗礼を施した」
Съ ж(е) Борисъ Болгары кр(ъ)стил ес(тъ) въ лѣт(о) етх'бех'ти. という古スラブ語で書かれた写本文書がある³²。この年は907年に当たるとされる。マルクワルトは、etx'を古トルコ語ädgü / edgü「良い・善い」³³、бех'тиをベルシア語「幸福」で解いている³⁴。漢字にしてみれば「嘉福」「安康」のような元号だったのかもしれない。

元号は、少なくとも、10世紀までブルガリアで使われていたなら、当世紀が元号使用の広がりへのピークだったことになる。

元号は19・20世紀、西洋（それをまねての日本）帝国主義・植民地主義の拡大によって廃れていく。

まず、ベトナム阮朝^{クエン}のフランスへの編入（1884年か）、清朝の滅亡（1912年）、日韓併合（1920年）で、絶滅に瀕する。21世紀は元号使用範囲縮小のピークである。存続するのは日本列島のみ。それも、西暦とのつつましい併用。支えは政令による官庁文書での義務的使用。

とはいえ、「月代・弁髪」に比べればまだいいかもしれない。ウクライナ・コサックの復古的使用を除けば、これは絶滅してしまったのだから。

「月代・弁髪」は騎馬民族文化に由来し、「元号」は中華文明から発生したが、広がった範囲はほとんどピタリと一致する。東の涯は日本列島、西の涯はドナウ川下流域。中華文明の拡大に騎馬民が一臂を借しているのも注意をひく。しかし、中華の紀年方も、騎馬民のファッションも今や見る影もない。年はキリスト誕生を起点に記され、ファッションはミラノ・パリ・ニューヨークからや

ってくる。ブルガル・ハン名録はこんなことを、今、我われに語りかける。

注

- 1 Moravcsik II, p.353。
- 2 Еллинский и Римский летописец. 古ロシア語で書かれた年代記。天地開闢から、補遺部分を含めるとビザンツ最後の王朝パレオログス朝中期までを扱う。ビザンツで創られた諸年代記を編集・編纂したものらしい。基本的部分は13世紀中頃までにでき上がっていたと推定される。19世紀、識者の目にとまり、研究が開始され、完全な校本は今世紀になって初めて出版された。
- 3 Кляшторный, p.262。クリヤシトヌイはタリアト碑文E 1より立案。タリアト碑文の原文は森安・オチル, p.168に見られる。訳文は森安、オチル, p.172。
- 4 アルタモノフ, p.180による。そこでの文献を再録する。Злагарски, В. Н., Нови известия на найдревния периодъ на българската история // Сб. Мин. Нар. Пров. XI. 1894. p.145-154; Marquart, J. Die altbulgarische Ausdrücke. S.7。ただしアルタモノフはこの説に反対し、オルガナはバガ・シャド莫賀設である、というグミリヨフ説に賛成する。Артамонов, p.180。
- 5 ギボン・中野訳, p.239, 240。
- 6 内田, p.379。
- 7 ДТС, p.581; クローソン, p.531。
- 8 Кононов, p.159, 202。
- 9 ギボン・中野訳, p.239。
- 10 Артамонов, p.188。
- 11 ДТС, p.599。
- 12 内藤, p.383, 392。
- 13 『旧唐書』, p.5183, 『新唐書』, p.6058。
- 14 ブラウニング, p.298。
- 15 Артамонов, p.174。
- 16 ССРЛЯ 8, p.1086で引用されるФетの例文では左側に垂れている。
- 17 <https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%81%E9%AB%B7>より転載。
- 18 <https://zh.wikipedia.org/wiki/%E9%AB%A1%E9%AB%AE>より転載。
- 19 Артамонов, p.174による。
- 20 ロシア語訳に従う。бреющие головы и носящие косы (Моисей Каганкатвацци, p.104)。英訳 (Dowcett) ではmen with shaven heads and men with long hair (Movses Dasxuranci, p.83)。2卷XI章。
- 21 Моисей Каганкатвацци, p.105, Movses Dasxuranci, p.83。
- 22 『騎馬民族史』, p.33。
- 23 『三蔵法師傳』, p.10。
- 24 「或有居家大姓相呼為遣可汗者, 突厥呼屋為遣, 言屋可汗也」(『通典』, p.5403)。
- 25 諸橋、卷8, p.1128。
- 26 『隋書』, p.1848。

- 27 『旧唐書』, p.5310、内藤p.409。
- 28 Черных П, p.353。
- 29 Даль, p.1227。
- 30 ССРЛЯ 17, p.427。
- 31 Marquart, p.1-30、 Бенцинг p.11-28。
- 32 Moravcsik, П, p.358。
- 33 ДТС, p.163。
- 34 Бенцинг, p.16による。

参考文献 [] 内は略記

- Clauson, G. *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford University Press, 1972. [クローソン]
- Marquart, J. *Die altbulgarischen Ausdrücke in der Inschrift von Čatalar und in der altbulgarischen Fürstenliste*. «Изв. Рус. Археол. ин-та в Константинополе» т. VХ. 1911. [Marquart]
- Moravcsik, G. *Byzantinoturcica I, II*, Berlin-Akademie Verlag, 1958. [Moravcsik]
- Movses Dasxuranci, «*The History of the Caucasian Albanians*» Translated by Dowsett C. J. F., Oxford University Press, 1961 (電子版). [Movses Dasxuranci]
- АН СССР. *Словарь современного русского литературного языка* т.8, 17 Москва, 1959, 1965. [ССРЛЯ8, 17]
- Бенцинг, И. *Язык гуннов, дунайских и волжских болгар*. «Зарубежная толология» Выпуск I. Москва, 1986. [Бенцинг]
- Даль, В. И. *Толковый словарь живого великорусского языка (4-ое изд.)*. Петербург-Москва. [Даль]
- Кляшторный, С. Г. *Азиатский аспект ранней истории хазар.// Хазар—Евреи и славяне*, т.16, Москва, 2005. [Кляшторный]
- Кононов, А. Н. *Грамматика языка тюркских рунических памятников*. Ленинград, 1980. [Кононов]
- Моисей Каганкатвацци, *История авган Моисея Каганкатвацци* Перевод с армянского Патканьян, К. СПб. 1862. [Моисей Каганкатвацци]
- Наделяев, В. М.; Насилов, Д. М.; Танишев, Э. Р.; Щербак, А. М., *Древнетюркский словарь*. Ленинград, 1969. [ДТС]
- Черных, П. Я. *Историко-этимологический словарь современного русского языка*. Москва, 1993. [Черных]
- 内田吟風『北アジア史研究』鮮卑柔然突厥篇 同朋社 1975. [内田]
- ギボン, エドワード 中野好之訳『ローマ帝国衰亡史』7 (ちくま学芸文庫) 筑摩書房 1996. [ギボン・中野訳]
- 慧立・彦棕 (桑山正進・高田時雄編)『大唐大慈恩寺三藏法師傳』松香堂 2000. [『三藏法師傳』]
- 佐口透・山田信夫・護雅夫訳注『騎馬民族史』2 (東洋文庫) 平凡社 1972. [『騎馬民族

史]

杜佑『通典』校點本、中華書局 1988 [『通典』]

内藤みどり『西突厥史の研究』早稲田大学出版部 1988. [内藤]

ブラウニング、ロバート著 金原保夫訳『ビザンツ帝国とブルガリア』東海大学出版会
1995. [ブラウニング]

森安孝夫・オチル（編集）『モンゴル国現存遺跡・碑文調査研究報告』中央ユーラシア学研
究会 1999. [森安・オチル]

諸橋轍次『大漠和辞典』大修館書店 1958. [諸橋]

『旧唐書』中華書局 1975. [『旧唐書』]

『隋書』中華書局 1973. [『隋書』]

『新唐書』中華書局 1975. [『新唐書』]

